福岡大学医学会ニュース

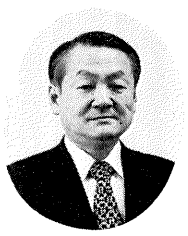
第５号

福岡大学医学会
福岡市城南区七隈
福岡大学医学部内
印刷　凸版印刷株式会社
福岡市中央区渡辺通り２－１

医学部10周年記念特集号

創立十周年について

十周年記念会会長　西園　昌久



本日、ご来賓各位のご臨席を賜わり、教職員並びに関係者一同相集い、福岡大学医学部十周年の記念式典を行ないえますことはまことに喜ばしい限りであります。皆様にはご多忙の中にご出席いただき心から厚くお礼申しあげます。

創立以来十年と申しましてもそれは客観的にはほんの微々たる期間であります。しかし、考えようによりましては人の一生のはじめにも等しく、未来に向って末永く常に発展せねばならない私ども医学部の性格を決めるきわめて重要な草創の期でありました。まがりなりにもここまでこれましたことは皆様のご指導のたまものであり あつくお礼申しあげます。

私どもの医学部は福岡大学を真の総合大学として完成させるためにとする学内の強い理念と、本日ご臨席下さいましたご来賓の方々に代表される社会の皆様の真に世のためになる医師づくりのご要請とによって誕生したものであります。

当時、全国の大学はその殆どが紛争の渦中にあり、自律性と自浄作用とを失っておりました。本学医学部教授として参加を求められました人たちは私学にこそ、そして福岡大学にこそ、人間の尊厳性と責任性とを高く評価し、真理が愛される新天地が創造されるであろうことを信じて身を投じたものであります。数多くの他の教職員の皆さんもそれぞれの事情はあれ私どもの味方として、仲間として参加して下さいました。

また、学生諸君が、世の中に学閥などがきびしく存在すると噂される中にあって、先輩も系列も何もない新しい医学校を選んで入学してくれましたことは、福岡大学が総合大学でありますこととともに私ども医学部の社会のニーズに応えようとすることの可能性を信じてくれてのことと考えます。

ともかく十年がたちました。天の時、地の利、人の和という言葉がありますが、これは私ども医学部の創立と発展のために用意されたもののように思われます。

課題は山積しております。重ねてご来賓各位の将来にわたるご指導をお願い申しあげ、教職員の私どもは明日を信じて更に精進につとめることをお誓いしてご挨拶といたします。

医学部創設時の回想

十周年記念会名誉会長　樋口　謙太郎

私が九大在職中（昭四十五）福岡大学に医学部の新設が企画されその準備のため協力を求められた。実は福岡大学の名は知っていたが、どこにあるかも知らなかったし、もちろん訪ねたこともなかった。初めてみる福岡大学は予想を遥かに越える宏大なものであった。たしかこの七隈の丘はもともとタヌキの棲む未開の土地であったはずである。いつの間にか八学部、二万余人の学生を包容する学園都市に変貌していた。

はなしを聞くと、福岡大学に医学部を増設する計画は早くからあったらしいが、他の学部と違って大変な費用を要するし、かつ大学紛争のあおりで、活発な活動を展開した医学部は敬遠されて延々になっていたとのこと。さらに設置場所もあちこち物色されたようで構内の未使用の土地に決まったのは最後だったという。ゆえに敷地としては充分でないきらいがある。

新設に当って私に課せられた使命は、スタッフおよび要員を揃えること、医学部および病院の設計設備、組織造り、カリキュラムの作製、あるいは完成までの代用病院の問題などであった。そして私が参画したのは昭和四十五年も暮のことで、認可申請の予定日まで一年そこそこの余裕しかなく、果してこの重大な任務が果しうるか否か自信は全くなかった。

まずスタッフの問題だが、全国公募の形式はとったものの、実際は九大医学部にすっかり負んぶした形になった。当時九州には新設医大の計画はなかったし、九大には優秀な教授ならびに助教授の候補者が温存されていたことが幸であった。もちろん久大その他からも採用したが、その多くは九大出身者であり、純粋な他大学関係者は極く少数になった。しかし選考過程には迂余曲折があり、人事のむつかしさを痛感させられた。盛夏の頃、設置審議会の各専門委員を歴訪したこともある。結局文部省の審査に当っては一度でパスして安堵の胸を下した。

もう一つ厄介な審査は私立大学審議会による資金計画である。その際借入金でなく、一定の自己資金が必要であった。もちろん学校法人としては相当の資金を保有していたが、さきにも述べたように医学部新設については学内の反対があり、他学部には絶対に迷惑をかけないことを条件として承認された関係で、福大の資金をそのまま流用できない悩みがあった。ゆえに医学部設置についての期成会ないし後援会が組織され、有志からの寄附が要請された。他の新設医大におけると同様に、この点疑惑を招いたようであるが、それにも拘わらず設立資金についての審査の方も文句なしに合格した。

設計については、はじめは充分余裕をもったスペースが考えられたが、実際は大幅に制限された。スタッフに予定されたメンバーには当然のことながら開学準備には積極的に協力してもらい、週一回九大の恵愛団や同窓会館に集まりいろんなことを相談してきたが、とくに設計については慎重に検討してもらったつもりであった。しかしさて完成の直前になると手直しや増設の要求が次々に出て来て予算を遥かに越えてしまい大学当局よりお叱りを受けた。器械、器具の備品についても同様であった。

組織体系については、はじめ医学部のみは他の学部と併列せず、福岡医科大学とする案を主張した。その理由は他の学部とは自ら異質のものが医学部にあり、かつ現業の病院を擁しているからである。米国流には Medical School, Fukuoka University の構想であった。しかしそれは認められず他学部と同格なものになった。

定員についても、規定通り基礎一、一、二、臨床一、一、三は当然としても、ことに臨床において診療要員の要求が強く、部長会議の席上、院長はしばしば吊しあげにあった。医師のみならず、パラメディカル、ラボランチン、セクレタリーなどについても同様であった。

福大医学部の設立に際して、その理念として、(1)正しい臨床医の育成、(2)地域社会医療への奉仕、(3)重点的総合体系の三つの基本的方針を定めた。この点は今日まで変ることなく遵守されている。

医学部の研究費については、最初教授会でその低額である点が問題になった。しかし福大当局の考え方は国立とは違っていて、仔細に検討すると国立のそれと大差がないことが判った。

医学部新設に当って私なりに心配の種であったのは、解剖屍体と看護婦とが果して必要数集めうるであろうかということだった。いろいろと対策を講じたが、結局蓋をあけると杞憂であった。

また代用病院の香椎病院は福大とは別の組織の医療法人とし、私が院長になった。九電病院を引継いだもので、職員は全部そのままを抱えにした。

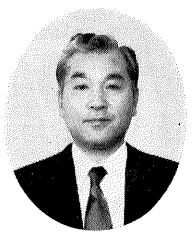
福大医学部の創設から今日までの歩みを顧みるとき、当初は試行錯誤の連続で、苦しみが深かっただけに、創立十周年を迎え、基礎が定まり若いエネルギーで発展の一途を辿っている現状をみると嬉しい極みである。それにつけても残念なことは、創立にあたって苦労をともにした船津、今井の両教授が亡くなり、ともに十周年を祝うことができない点である。

（その他憶い出は次から次に出てきて、指定された紙数では盛り切れない。九大医学部同窓会の需めに応じて、その機関誌『学士鷲』（昭和五十三、二、十）にもう少し詳細な記述をした。また本稿の一部は学生が出した福大医学部十周年記念誌にも投稿した。）

通過儀礼

―医学部十周年記念にあたって―

十周年記念会副会長　朝長正道



人間の一生は儀礼に始まり、儀礼に終る。子宮の中でやっと自分で動こうかという時には腹帯の儀で圧さえつけられ、俗界を去ったら告別の儀で忘れていたことを思い出される。この世の中では誕生日だ、七五三だ、入学式に卒業式、成人式、入社式、結婚式つづいて子供の誕生、歓迎会、就任式、送別会、祝賀会、等々数え上げればきりがない儀礼の連続である。このような儀礼も文化人類学的には意味のあることであり、その時代、その社会で始まり、伝承される必然性があったものである。ある人がある立場から別の立場へ変質するのを、その人および周囲の人達に受け容れさせる過程、これが通過儀礼である。このため大きく変質する場合にはそれまでの世界から隔離し、一定期間の後に別の立場の人間として帰ってくるということが必要になる。たとえば明治、大正そして昭和二十年までは、徴兵検査、兵役義務は、あらゆる社会層の、すべての男性にとって平等な通過儀礼であった。兵舎の中に隔離され、俗世間とは異なる規節で律された後社会に復帰するという典型的な通過儀礼である。男性のみならず女性も、徴兵検査を受けた、兵役に服したことを男性として完成したシンボルとしてうけとめており、この通過儀礼がわが国の社会に多様な形で影響したことは疑いようがない。

また教育や学制が論議される時古き良き時代の旧制高等学校がいつも話題となる。この三年間はエリートコースへの通過儀礼として捉えた方が理解しやすいように思う。世間の人も別世界の人間として遇してくれ、破目をはずしても許してもらえていた。しかしこの間に自からを律することを身をもって覚えていったものである。

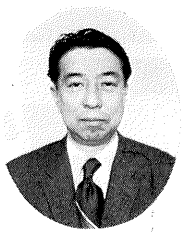
現代は通過儀礼形骸化の時代である。今でもやりようによっては大変有効な通過儀礼は多い。しかし殆んどは形だけを真似し、さらに派手になっているが、その内容意義については全く無頓着である。大学の教養過程もそうである。成人式も同様、そして医師の卒後研修も然り。人生設計が幼稚園の選択に始まっている現代、学生にも社会人にも透明な時期、変質する機会が全く与えられていない。モラトリアム人間を作り出す原因の一つであろう。

医学部十周年記念も通過儀礼である。事業が無事にすんだことは大変喜ばしいことである。しかしわが医学部が変質せねば、この十周年記念も単なる出来事におわり残されるのはモラトリアム医学部であろう。変質は飛躍である。別のパラダイムにのり移り、別の見方を知ることが大切である。

ふしめとけじめ

―十周年にあたって―

十周年記念会副会長　曽田豊二



十年間たつと、その年が大切な節し目の時になっていると思われてくる。とくに、ことがはじまってからの十年目は、大事なまとめの時期といえる。

しかし、いま、その時の上に立ってみるとこの十年は、本当に早く経った感じが強く、ふし目だのまとめだの言い得ないような気持ちになる。

これは日々が忙しかったためにそのように感じられるのか、何も地に爪あとすら立て得なかったために、このように感じられるのかはなはだ心もとない。

今思うと、はじめの五年間は、そして第一回の卒業生が出て、評価をうけるまでは、やはり大学・医学部としては、充分ではなかったように思われる。

実際、人も、ものも、こころも必ずしも充足していなかったようで、他の大学医学部・医科大学に伍して、はじめから大学と称するには聊かのはじらいがあった。このように思うと医学校として大学としてちゃんと人前に地位をあきらかにし得るようになったのは、この五年間位のものであろうか。

いづれにしても、この十周年目に対してはふし目、折り目の意識があるし、このことが万事につけて自然と意識にあがる。

この間に着実に医学部ではアニマルセンターが出来、アイソトープ研究室やよい講堂が逐次増設されて充実を見せ、そして五回の卒業生を誕生させて評価をうけた。また病院も年々患者数がまし、期待と信頼を得て地域医療に貢献し新しいというばかりでなく、かなりもう深みのある、さわやかな医学校となり病院になったと認識され、われわれ自身にもどこか喜びが、おのづから湧いてくるようになった。これは私ばかりではないと思う。

その意味では、よい十周年の記念式がメモランダムとして行われ後々まで記録されたのは嬉しい。

このふし目は勿論、これからきの医学部、病院、そして大学の未来の第一頁であるのだが、それだから、それなりに、けじめが必要であろう。

このけじめの基本は、この福岡大学の医学部・病院とは何か、そしてそれで進むべき道はどうかという、問いかけと対応、こたえだと考えている。これは創設当時より全学をあげて考えたことでありなお、新しく生きている。

私学の医学部・病院としての私学らしい、ユニークな、生き生きとした風潮やかん達な思想と雰囲気は、ひとびとの心の中に焼きこまれ期待されているが、これが、けじめの初心だと思っている。

十八年たつと二十一世紀だが、連続とはいえ、頭の中では、この近未来が二十世紀と異なるという特別な感じがあるので、このことは、充分頭に彫みこんでおく必要があろう。

また、この福岡大学の医学部・病院はどうあるべきかと考える際この初心とともに、今の時代の教育と医療の動向を分析する力をたかめ、一致して考え、行動することが大切だと考えている。

しかしこのとき、われわれが考えきらなかったことや考えられなかったことを衆知をあつめて、探りあて、きりひらくことの大切さは思い知っているが、これも自分を奮い立たせることで採りあてることが出来よう。いづれにしても本当にここで奮起出来るものをお互いにもって、丁度、創設当初のように活気あふれて進まねばならないと思っている。

創立十周年記念事業の準備・実行について

十周年記念会実行委員長　重松峻夫

福岡大学医学部が昭和四十七年四月に創設されて今年で満十周年を迎えた。今春三月には医学部は第五回卒業生を送り出し、大学院も最初の博士過程修了者、三名の医学博士を誕生させた。これでわが福大医学部もようやくその創設過程を完了したと言える。

この創立十周年を迎えるに当って、有意義な記念事業をとの提案が昨年八月の教授会に出され、その検討企画のために十周年記念事業準備委員会が設けられた。

委員長　重松峻夫（公衆衛生）
委　員　今永一成（生理第一）
　　坂本公孝（泌尿器）
　　濱崎直孝（生化第一）
　　曽爾　彊（解剖第二）
　　守田則一（健康管理）

福大では、これまでに各学部の創立記念事業を大々的に行った例はなく、大学として特別の援助もないとの事で、医学部でも自前で質素に、しかし、市民の中にはいり市民との対話の中で、福大医学部、病院の成長した姿を示し、創立以来御協力下さった皆さんへの感謝を示すような記念事業をとの主旨の下に準備委員会で種々検討し、十一月記念事業の骨格となるべき粗案を学部長に提出した。

記念式典、祝賀会のほか、市民を対象として成人病に関する講演会、医療相談と医師会と提携しての医療問題ティーチインを柱に、血圧、検尿、心電図その他可能な検査の無料サービス等を実施、開催時期は五十七年六月頃が適当である、また記念誌発行は別途考慮すべきであるとの結論であった。

この準備委員会の報告をうけて昨年十二月の教授会で、創立十周年記念会および同実行委員会の設置が決められ、ただちに医学部教授会を中心に同窓会、父兄後援会の参加を得て、医学部創立十周年記念会が発足し、その中に実行委員会が設けられた。

福岡大学医学部創立十周年記念会
会　長　西園昌久医学部長
名誉会長　樋口謙太郎初代医学部長・病院長
副会長　朝長正道病院長
同　　曽田豊二前病院長
幹事会　医学部教授全員、同窓会代表、父兄後援会代表
実行委員会
委員長　重松峻夫
委　員　荒川規矩男（講演会担当）
　　奥村　恂（〃）
　　井上幹夫（医療相談担当）
　　檀健二郎（ティーチイン担当）
　　今永一成（式典祝賀会担当）
　　坂本公孝（記録記念誌担当）

実行委員会は今年早々から会場の選定、具体的な企画にはいり、期日は七月三、四日とし、会場は市中心部に適当なものがなく、西区藤崎の勤労青少年センターとした。その直後西日本新聞から同社が計画している西日本健康フェアとの合体の申し入れがあり、委員会で検討した結果、開催期日が全く同じで会場は市中心部であり、新聞の宣伝力を考えると、記念事業を同時に別の場所で行うことは無理で、時期を変更するか、福大の主体性を失わない形で合体する以外にないとの結論で、西日本新聞と協議の結果「福岡大学医学部創立十周年記念・'82西日本健康フェア」のタイトルで両者共催の形で実施することになった。その結果当初の計画は大幅に拡大され、パネル展示、がん検診、栄養相談、体力測定等が加わり、別記の如く大規模な記念行事となった。またこれとは別に福岡県医師会と共催で「これからの医療と医学教育」に関する講演会も実施が決った。

このような経緯で準備開始の段階で計画が大幅に変更拡大されたため、実際に企画の大筋が決り具体的準備にはいったのは四月の声をきく頃となり、数カ月の短期間にこれらの事業の実施計画の細部を作り準備を整えるのは大変な難事業でした。計画が拡大したため当初の実行委員だけではカバーできず、各パート毎に担当者を別にお願いし、実行委を拡大して担当者会議で計画をすすめる事になり多くの先生の御協力を戴きました。とくに、パネル展示は準備委員会で時間的に困難として企画からはずされたものが復活し、全体的構想もないままに、同窓会の諸君を中心に各教室へお願いしてアイディアを集め、その後から取りまとめる事になり担当の為末、内藤両助教授には迷惑をかけました。このような状況で果して間に合うのか、うまく運営出来るのか大変心配でしたが何とかやり遂げねばならず、最後は実行委員会で独断的にすすめた面もかなりあり、各方面に無理をお願いした点も多々あったと思いますが御容赦戴きたいと思います。

今この記念事業をふり返ってみて、何とか西日本新聞の事業の中に埋没することなく、市民の中に福大医学部の存在と成長を示すことが出来たと思います。また、この記念事業を通じて大学では経験出来ない市民との対話、健康相談、検診、展示、講習等の参加者の反応、講演会の予想を上回る聴衆とその質疑等、健康への関心とくに成人病への関心の高まり、市民の大学への期待、大学をみる目等を感じとることが出来たと思います。今後高令化社会を迎えて医療が予防からリハビリまで含む包括医療へと進んだ場合、生きた社会の中で生活する人々に如何に対応すべきか、病院へ来た患者とは違ったものがあるのを感じたことと思います。

色々の問題を含みながらも、兎に角何とか無事この記念事業をすますことができ、実行委員長の責をどうにか果すことが出来ましたのは、医学部、病院のスタッフの皆さんの協力のお陰と感謝しています。とくに同窓会の諸君の努力と、各担当をして戴いた先生方の協力、そして事務処理、各種の交渉、準備等に献身して下さった池田次長をはじめとする医学部事務課の皆さんの努力の賜ものと思います。また資金援助と側面からの協力を下さった父兄後援会、講演会を共催して下さった福岡県医師会、さらに外部から御協力戴いた福岡県対ガン協会、福岡県栄養士会、富士通、福田電子、展示に協力戴いたアロカ、東芝メディカルの皆さんに深甚の謝意を表します。

福岡大学医学部創立十周年記念事業内容

期　間　昭和五十七年七月二～四日の三日間

会　場　第一会場　福岡国際センター
（展示・検診・相談その他）
第二会場　福岡国際ホール
（記念式典・祝賀会・医学講演会等）

記念行事

一、第一会場七月二、三、四日

パネル展示　三日間
四部門六十八枚のパネルを作製展示した。レーザーメス、超音波診断機器およびCTのスライド展示

健康相談　三日間
七月二日　心の健康
七月三日　婦人と子供
七月四日　成人病

循環器検診　七月四日
身長、体重、尿検、血圧、心電図による検診指導

栄養診断および相談　三日間
「FACOMシステム80」による簡易栄養診断および指導

特殊栄養指導　七月四日
成人病健康相談と連携して特別指導を実施

人工蘇生法指導　七月三、四日
映画、モデル人形を使っての実地指導

がん検診　三日間
胃、子宮、乳腺のがん検診を福岡県対ガン協会の協力により実施

体力測定、運動処方　三日間
福大体育学部運動生理研究室の協力により実施

この福大コーナーのほか、西日本新聞の催しとして、健康機器、家庭医薬品、健康食品その他の総合展示コーナー、ゲートボール、スピードガン、健康体操その他のアトラクションが同会場で行われた。

二、第二会場七月二、三日

講演会
㈠「母と子の健康」シンポジウム　七月二日
司会　小田　禎一
妊産婦の保健　金岡　毅（産婦人科）
育児のこつ　小田禎一（小児科）
学童保健の問題点　津留　徳（小児科）
こどもの精神衛生　牛島　定信（精神科）
㈡成人病講演会
司会　荒川規矩男
「人間いかに死ぬべきか」
医事評論家　水野　肇
㈢「成人病」シンポジウム　七月三日
司会　志村　秀彦
奥村　恂
肥満と糖尿病　浅野　喬（内科第一）
高血圧　池田正春（内科第二）
心臓病　荒川規矩男（内科第二）
胃がんと肺がん　犬塚貞光（外科第二）

三、記念式典及び祝賀会

記念式典　七月三日十七時
学内外より来賓をお招きして記念式を行い、その中で創立当時の功労者である、
樋口謙太郎　初代医学部長
安河内醇　元病院事務長
江浦重成　前父兄後援会長
へ感謝状と記念品を贈呈した。

祝賀会　七月三日十八時三十分
祝賀会は毎年の福友会の懇親会および同日正式発足した医学部同窓会と合同で行い、学内外から来賓多数の御出席を得盛大に行われた。

なお同じ七月三日十七時三十分より、医学部同窓会の発会式が、国際ホールの中ホールで行われた。

四、福岡県医師会との共催行事

合同講演会
「これからの医療と医学教育」
日時　昭和五十七年六月二十六日
会場　都久志会館大ホール
司会　松井敬介（県医師会理事）
　　檀健二郎（福大医麻酔科教授）
「現在の医療とこれからの医師」
厚生省病院長管理研究所長　佐分利輝彦
「卒後教育の実際とこれからのあり方」
沖縄中部病院外科部長　真栄城優夫
「医学教育の現況とこれからのあり方」
福岡大学医学部長　西園　昌久
指名討論　福岡県医師会理事　森口　正
　　福岡県医師会理事　安藤精弥

十周年記念行事における数々の活動

▽…福岡大学医学部は昭和四十七年四月に開設されたので、今年で十周年を迎えたことになる。…△
▽…昭和四十八年八月には附属病院が活動を開始し、その後附属看護専門学校、アニマルセンタ…△
▽…ー、大学院医学研究科、研究棟別館、新講義棟、ＲＩ研究施設などが設置され、名実共にメ…△
▽…ディカルセンターとしての内容が整えられた。現在、医学部・病院には二六〇名を超える教…△
▽…育職員が教育、研究、診療の各分野で活動しており、本年三月の第五回卒業生を含めて、計…△
▽…四六九名の医学士を世に送り出し、その大半は第一線で活躍している。…△
▽…地域社会医療への奉仕を開学理念の大きな柱として掲げた当医学部の十周年記念行事とし…△
▽…て、地域住民の中へ直接溶け込み、十年間の成長を披露するという目的から、数々の催しが…△
▽…企画、実行され、盛会裡に行事の幕を閉じた。今回の行事としては、一、記念式典、祝賀会…△
▽…のほか、二、福岡県医師会との共催で「これからの医療と医学教育」と題する合同講演会が…△
▽…行われ（六月二十六日、都久志会館）、三、市民の方達を対象にした健康講演会（七月二―…△
▽…三日、福岡国際ホール）、四、西日本新聞社との共催で、健康相談、ガン検診などを含めた…△
▽…「健康展」（七月二―四日、福岡国際センター）が、それぞれほぼ平行して開催された。こ…△
▽…れらの行事に出動した関係者は、延約五〇〇名に及び、総計約六〇〇〇名の市民が訪れた。…△

（左上）　記念式典で祝辞を述べる瓦林潔理事長
（　右　）　万歳三唱　右から樋口名誉会長、西園会長
（左中）　和やかな雰囲気の祝賀会（於国際ホール）
（左下）　福岡県医師会との合同講演会（於都久志会館）

記念式典およびお祝賀会

とき　昭和五十七年七月二日
ところ　福岡国際ホール

福岡大学医学部創立十周年記念式典ならびに祝賀会は、昭和五十七年七月三日、福岡国際ホールにて開催された

記念式典

式典は、午後五時より来賓各位のご臨席のもとに、医学部・病院の教育職員、事務職員約一〇〇名が参加して行われた。

まず十周年記念会会長・西園昌久医学部長が挨拶にたち、「この医学部は福岡大学を真の総合大学として完成させようとする学内の理念と、世のためになる医師づくりへの要請によって作られた」と述べ、「この十年間は医学部の性格を決める重要な草創の期であった」と挨拶した。ひきつづき来賓として列席された瓦林潔理事長は「医学部を作るために、そして福岡大学を総合大学として発展させるために理事長に就任した」と創立当時を回顧し、「目下の急務は研修病院を作ることである」と意気軒昂たるところを示された。そして、「医学部の使命を十分に発揮して、立派な医師を送って欲しい」と結ばれた。宮野成二副学長は、「医学部は他の学部とは色々な意味で異色であり、創設期には多くの困難な問題もあったと思うが、よくこれを克服して来た。この十年間は体裁を整えた段階であり、すべてはこれからにかかっている。現状に甘んぜず、未来に向って闘う姿勢を示すべきだ」と、また石田正太郎福岡県医師会長は「医師会員は福大医学部が出来たために色々と相談出来感謝している。今後も地域医療に貢献して欲しい」と、清沢晋福大後援会代議員は、「東の慶応、西の福大と呼ばれるよう大いなる飛躍を期待する」と、それぞれ祝辞を述べられた。

最後に、医学部設立当初に尽力された初代医学部長・病院長樋口謙太郎教授、初代病院事務長安河内醇氏、初代医学部父兄後援会長江浦重成博士の三氏に、感謝状と記念品を贈呈して式を閉じた。

当日来賓ならびに招待者として列席いただいた各位のご芳名を記すと、つぎのとおりである。

福岡大学理事長・瓦林潔、同副理事長・川辺良一、同・山本哲夫、福岡大学副学長・宮野成二、福岡県医師会長・石田正太郎、福岡市医師会長・阿部輝明、福岡大学後援会代議員（医学部）代表・清沢晋、医学部父兄後援会代表・権藤祐一、有信会理事長・末永直行、元病院事務長・安河内醇（令息代理出席）、前医学部父兄後援会代表・江浦重成（権藤代表代行）、福大後援会代議員（医学部関係）各位、医学部父兄後援会役員各位、元教授会構成員各位、福大病院検査部、放射線部、薬剤部各部長・副部長・技師長・副技師長・看護部長・副部長各位、附属看護専門学校教務主事、病院事務長・前事務長・事務課各課長・看護専門学校事務課長、アニマルセンター事務課長、ＲＩ施設課長、図書課長、施設二課長

祝賀会

祝賀会は、午後六時より前記式典出席者のほか、後記招待者、医学部・病院福友会会員、医学部同窓会会員を加えて、計三五〇名が出席し、盛大に開催された。

開宴にあたり、西園昌久記念会会長は、「十周年を記念して市民の中に生きていく福大医学部を定着させるための行事を企画した」ことを披露し、「これらの企画や祝賀会、父兄後援会、同窓会、福友会の援助によって果された」ことを紹介、「これら一連の行事を完遂したことは今後の福大医学部にとってきわめて有意義なことである」旨挨拶した。つづいて朝長正道病院長は、「この十年を契機として変革を恐れず大きく発展させたい」と決意の程を披瀝した。樋口謙太郎名誉会長は、医学部創設にまつわる苦心談を披露し、感慨深く懐古した。医学部父兄後援会代表・権藤祐一氏は、父兄後援会発足のいきさつについて語られ福岡市医師会長・阿部輝明氏は、「医の原点にたった人格秀れた医師を養成して欲しい」と、それぞれ祝辞を述べられた。このあと、瓦林潔理事長の乾杯の音頭で祝宴に移った。

宴会では、池原征夫、福島武雄福友会幹事、山嵜節同窓会会長の司会のもとに、職員、同窓会の色々な余興が、またコロンビア歌手麻川桃代さんの新曲が披露され、和やかな雰囲気の中で歓談が続いた。最後に有信会会長末永直行氏の音頭で万才三唱があり、盛会裡に会を閉じた。

祝賀会にご招待した方々は、前記記念式典列席者のほか、つぎの諸氏である。

福岡大学第二役職者各位、元副学長、元教務部長、元学生部長、事務局長、医学部・病院事務課長補佐各位、看護婦長、体育学部教授（三名）、福岡県・市医学会副会長、学術担当理事、福岡県対がん協会会長・事務局長、西日本新聞社専務・常務取締役、福岡県栄養士会会長、健康フェア協力業者支店長各位。

（今永一成記）

合同講演会「これからの医療と医学教育」

とき　昭和五十七年六月二十六日
ところ　都久志会館

福岡大学医学部創立十周年記念行事のトップを切って、「これからの医療と医学教育」と題するティーチインが、福岡県医師会との共催で開催された。福大医学部・病院関係者、医学部学生、医師会会員、計三五〇名の参会者があり川崎医大川崎明徳副理事長も来賓として参加され、有意義な会であった。

この会は、檀健一郎麻酔科教授、松井敬介福岡県医師会理事の司会によって、石田正太郎県医師会長の開会の挨拶にはじまり、(1)「現在の医療とこれからの医師」と題する厚生省病院管理研究所佐分利輝彦所長、(2)「卒後教育の実際とこれからのあり方」沖縄県立中部病院真栄城優夫外科部長、(3)「医学教育の現況とこれからのあり方」福岡大学西園医学部長の、それぞれの講演、森口正県医師会専務理事、安藤精弥県医師会理事の特別発言があり、各講師、前記の川崎副理事長も交えた討論があり最後に西園医学部長が謝辞を述べて盛会裡に終了した。

講演要旨

(一)　現在の医療とこれからの医師

厚生省病院管理研究所長　佐分利輝彦

医療に求められている基本事項として、医療の近接性、継続性、包括性、総合調整、責任性、および人間性の六つがあげられる。このおのおのについて、わが国における現状を分析し、幾つかの問題点を指摘した。しかし、欧米諸国に比し、世間一般でいわれている

（以下次頁下面に続く）

左　上　記念講演会での活発な質疑応答
右　上　記念式典会場開会式　左から石田正太郎県医師会長、福田利光西日本新聞社社長、樋口謙太郎名誉会長、西園昌久会長、阿部輝明市医師会長
左　中　卒業生によるパネル展示
左　下　人工蘇生法の実習風景
右　下　同窓会発会式　山嵜節会長の挨拶

（前頁下面より）

程医療体制が不備であるとはいえず、民間の活力を利用した医療システムは、医療が国民の身近に存在しているといえる。今後、医療供給体制、マンパワー、医療経済等、難しい問題もかかえているが医療需要は増加の要因が多い。医師急増時代への突入、低医療費などの予測される医療環境に対し、医師自身が自信を失っているようにみえる。将来を確信して、医療に対する信頼感を回復することが急務である。

㈢ 卒後教育の実際とこれからのあり方

沖縄県立中部病院外科部長　真栄城優夫

一般医を教育するに当って最低限必要なことは、救急蘇生が出来ること、正常分娩を介助出来ること、および救急患者の初期治療を誤りなく遂行出来ることである。そのためには、患者数が多く、救急医療を行っている病院が望ましい。中部病院は、これらの条件が整っており、米国統治下時代ゴールド博士によって卒後研修の基本が確立され、ひきつづき現在まで一般医の育成を目的として教育が行われている。卒後教育に必要な条件としては、研修者の生活費と宿舎を提供すること、優れた指導医が常勤し、教育に必要な患者数が十分確保されていること、ローティションによって広い知識と技能を実践的に供給することが大切である。中部病院は、将来改善すべき幾つかの問題点はあるが、わが国における一般医を養成するための卒後教育としては、もっとも優れた方式で実をあげていると思う。

㈣ 医学教育の現況とこれからのあり方

福岡大学医学部長　西園　昌久

わが国のみならず、世界的に疾病構造、環境条件の変化が起っている。それと共に、社会の医療と保健ニーズも推移しているが、医学教育に当る者としては、時代の要請に応え得る医師を作り出さねばならない。しかしながら、わが国の医学教育の伝統は、このような要請に的確に対応しているとはいえず、世界の医学教育の理念と実践に対してむしろ鎖国状態をつづけているといっても良い。福岡大学は、私学という利点を大いに生かして、柔軟に対応すべく、五つの教育目標を掲げ、入学者選抜やカリキュラムの抜本改正を行いつつある。

その第一は「一般医としての能力」をもつことである。社会に出てどのような分野で医療に従事するにしても、十分に対応出来る幅広い知識、技能を身につけた医師を育成しようというのである。第二は「保健チームのリーダーとしての指導性」である。医師だけが一人名医であっても、治療が進む時代ではない。医療チームの中での指導力が問われるわけで、チームリーダーとしての資質は重要である。第三は「自修性」である。医学の進歩に対応するためには、生涯自修の心構えと実践が求められるのはいうまでもないことである。第四は、研究的態度で問題を解決する習慣と能力を身につける「問題解決の能力」を習得することである。以上を総括して必要なことが、「人間性」の育成で、人間医学の本質に根ざした医師作りを福大における医学教育の基本理念としている。

最後に、これらの目標に向って実践するに当って問題になる隘路を指摘し、理解と協力を要請した。

㈤ 討論

森口正氏は医事紛争を担当した経験から、医師の法律的知識の必要性を強調し、社会的にも広い視野をもつことを要望した。安藤精弥氏は、医師過剰時代を迎えることについての問題点をあげ、最近の医師国家試験に関連した医学教育について見解を述べた。川崎明徳氏は、卒後教育を制度化するための問題点、私立医大および病院経営上の財政問題について発言した。さらに県医師会興村氏は、医師偏在解決法について提言した。

これらの発言に対し、佐分利、真栄城、西園三講師よりそれぞれの立場で見解の表明があった。最後に、司会の松井理事から「まとめ」のコメントがあり、約三時間にわたる会を終了した。

健康講演会

とき　昭和五十七年七月一・二日
ところ　福岡国際ホール

「母と子の健康」シンポジウム

七月二日午後一時三〇分より、小田禎一教授司会のもとに、つぎの四氏の講演が行われ、その後約一〇〇名の聴衆との間に活発な質疑応答がくりかえされ、午後四時散会した。

㈠ 妊産婦の保健

産婦人科　金岡毅助教授

妊婦にとって必要なのは、①健康の維持、②健全な環境、③安定した家庭、④調和のとれた食事、⑤規則正しい生活、⑥定期的な検診などである。検診のさい、血液型、貧血の有無、肝・腎機能、検尿、血圧、ガン検査、体重測定などが行なわれる。最近、STORCH感染（梅毒、トキソプラスマ風疹、サイトメガロ、肝炎）が問題になっているが、これらの検査も必要である。喫煙、飲酒、薬物放射線の害についても留意しなければならない。妊娠中も、出産後も、母と子のきずな、スキンシップは極めて重要である。

㈡ 育児のこつ

小児科　小田禎一教授

乳幼児死亡の減少、平均寿命の延長に伴って、多産多死社会から少産少死社会へ、大家族社会から核家族社会へ、農村型社会から都

（以下次頁上面に続く）

（前頁下面より）

市型社会へと変化しつつあるが、その中で子供の位置づけも変ってきている。子供は財産とされ、投資の対象となり、都市の中で孤立化し、自然からも遠ざけられてゆくようである。子供の個性を認める子供中心の育児か、親の理想に合わせようとする親中心の育児かを選ぶのは親であるが、多くの親はこの矛盾に悩んでいる。

母乳栄養がよいか人工栄養がよいかの問題がよく論じられるが、母乳がよいという最大の点は、抱く、なでる、話しかけるという母親の働きかけ（マザーリング）が自然にできやすいことにあると考える。ミルクであっても、それができればよい。また、上気道炎（かぜ）、小食、偏食、腹痛、どもり、夜尿など、正常児にみられるありふれた症状を過大視せず、無用な干渉を避けることも育児のこつの一つであろう。

㈢学童保健の問題点・とくに学校集団検尿

小児科　津留　徳講師

はじめは軽い血尿・蛋白尿がみつかっても、見かけは元気なことが多いのでつい放置しがちである。しかし、昭和五十四年から全国的に実施されている学童集団検尿の結果、その中に腎機能が次第におかされてゆく慢性腎炎がまじっていることがわかってきた。福岡市では、異常者に対して第三次までの検査を行い、診断を確定している。もちろん、二次、三次検査で正常と判定されることも多いので、一次で問題があっても心配には及ばない。もし不幸にして腎臓病であると診断された場合は、十分な治療を受ける必要がある。

㈣母子の精神衛生

精神科　牛島定信助教授

子どもの人格発達は、母親に抱かれることにはじまる。このとき赤ちゃんは、安定感と身体的満足感をおぼえ、母親の腕の中で何でもかなえられるという万能感と、それに伴う空想の発達がおこってくる。これをもとにして自我の発達、自立への指向が生ずる。その後、一人でいる能力を身につけ、一人でいることを楽しみ、他人がいても自分を見失わないようになる。相手に対する思いやりも育つ。しかし、この独立の過程には自分のもっていた母親像をたえず破壊し、自分の成長に合った新しい母親像を作り直すという「攻撃性」または「憎しみ」の要素が重要な役割をはたしている。この間母親は、子供と一体化した状態から次第に離れ、自分の生活を持つようにすると同時に、いつでも子供と共に居るという安心感を子供に与えることが必要である。精神的な健康とは、年令相応の情緒的成熟を示していることで、遅すぎるのも早すぎるのも異常である。また、母親の役割には、父親を含めた家族、社会が密接にかかわっていることはいうまでもない。

㈤まとめ

司会　小田禎一教授

このシンポジウムでは、からだと共に心からみた子供の発達がとりあげられ、世相への批判もおりこまれた。また、妊婦検診、腎臓検診など新しい話題も紹介され、有益であったと考える。質問、討論もさかんに行われ、盛会であった。

（小田禎一記）

成人病講演会

「人間いかに死ぬべきか」

医事評論家　水野肇

七月三日午後一時より、荒川規矩男教授の司会で、約一時間の講演が行われた。参会者は六五〇名で盛会であった。

(1)死とは

「死」の定義は医学教科書にもない。日本では三つの兆候、即ち散瞳・心停止・呼吸停止が揃った時に死の宣告を家族に伝える習慣になっているが、米国では脳死を複数の医師が確認する。しかし細胞によっては棺桶の中に入ってからもまだ生きている。

臓器死、細胞死、社会的死、哲学的死などと「死」の確認にも種類がある。

(2)「死」の恐怖

人が死を恐れる理由は三つある。

①未知の世界で、帰ってきた人がいない

②人間すべて現状維持を希望したがる

③伴うであろう苦痛と苦悩への恐怖

苦悩を感じるのは、人間は未来について考えるからである。その点動物にはない事である。人間で未来を考えない場合に三種あり、①恍惚の人となるか、②麻薬に浸るか、③大脳前頭葉切除術を受けた時である。

死の恐怖が一番よく語られるのは癌患者である。これは死が決定し、しかも死までの時間が長く与えられているからである。特に日本人は欧米人より深刻である。彼らの死は神に召されるという考えで、本当に病院には牧師がいて苦悩から救う活動が医師が苦痛を救うのと併行して行われている。日本人の場合、お坊さんが生きている中から病院に出入りしたら大変だろう。日本人は死を生の延長線上でとらえている（例えば三つの河を渡る）ので、それが途切れる不安からPanicに陥いりやすい。

従って「死」の宣告も欧米では普通に行われているが、日本ではcase by caseでやるより他ない。例えば初期癌で殆んど一〇〇%curableな場合の手術の説得には都合がよいが、気の弱い人や、特にエリート族には却って参る人が多い。

(3)死に方

米国人は「癌」で死にたいか、「急性心筋梗塞」で死にたいかと問われると、三〇%が癌の方をとる。身辺整理の時間が出来るからだという。日本人に聞いたことはないが、聞かなくても恐らくみんな「急性心筋梗塞」の方を選ぶのではなかろうか。昔から「花は桜人は武士」といって散り際のよさを好む民族であるから。恐らく日本人誰でも理想とするのは、前日迄全く平常通りに活動していたのに翌朝一向起きてこないので家族が行って見たら死んでいたというのが日本人の平均的死に方への希望であろう。

(4)いかに生きるか

そのような死に方をするには、手遅れの成人病にならないよう、早期から予防や健康診断に気をつけることである。手遅れで仮に半身不随で五年や十年生きのびても仕方なく、自他共に迷惑なことではなかろうか。いかに死ぬべきかはいかに生きるべきかにかかっている。

（荒川規矩男要約）

「成人病」シンポジウム

水野氏の講演にひきつづき、志村秀彦、奥村恂両教授の司会で、約二時間半にわたって開催された。

冒頭、志村教授より今回の記念行事の一つとして「成人病」シンポジウムがとりあげられた主旨についての解説があり、左記のごとき各講師のわかり易い講演と質疑応答がなされた。

(1)アルコールと肝臓病

内科第一　奥村　恂教授

わが国の肝障害は欧米に比べるとウイルスに起因するものが多いが、最近のアルコール消費量は戦前の六倍に達し、アルコールによる肝臓病が最近着実に増加しつつあることを示した。アルコールを長年飲むと肝障害をおこし易く、とくに清酒換算五合以上十年間で肝硬変発症の確率がきわめて高いことを述べ、従来はアルコール性脂肪肝から肝硬変になると考えられていたが、最近では急性アルコール性肝炎をくり返すことによって、肝硬変へすすむことが明らかにされている。日頃健全な肝臓の人は二合くらいまでの晩酌ならば肝臓には問題はないと思うが、慢性肝障害をもった人はできれば生涯断酒するにこしたことはない。しかし検査値が安定していれば、数日おきに一合あるいはビール一本くらいは許されることもありえようと結んだ。

(2)肥満と糖尿病

内科第一　浅野喬助教授

肥満では末梢組織での脂肪細胞が肥大し、インスリン受容体が減少していて、インスリン作用の減衰がみられること、過食、肥満がインスリン不足を助長し、先天的に糖尿病素因をもつ人はここで発症する。肥満糖尿病には食事療法と運動療法があり、食事療法の第一は一日必要エネルギー量として体重kgあたり25～35カロリーとする。外来で一カ月間経過観察し、体重、血糖に変化がなければ入院とする。運動療法は肥満度＋20%以下になって開始する。これらで血糖コントロール困難な場合、初めて薬物療法を行う、と糖尿病治療の基本方針について解説した。

(3)高血圧

内科第二　池田正春講師

わが国の死因の二、三位を占める脳卒中と心臓病も高血圧と深い関係があることについて、高血圧のsilent killerとしての病態を解説した。高血圧の予防には35才になったら検診を受け、自分の血圧を知り、合併症にならぬよう注意する。それにはストレスの解消、適度の運動が有効で軽症高血圧症では降圧効果がみられる。食生活とくに食塩とカロリーの問題も重要で、かってアメリカで健康食と称られた日本食も、塩分高と警告されている事実を紹介した。適当なカロリーで肥満を防ぐとともに、高血圧の人は専門医の指示を守ることの重要性を強調した。

(4)心臓病

内科第二　荒川規矩男教授

心臓病を自動車のエンジンの故障に例え、日本で増加しつつあるのは心筋梗塞や心不全であることを示した。これらは日常生活の中の多数の因子、なかでも生活の富裕化による重複の危険因子によるもので、高コレステロール、高血圧、過喫煙、肥満糖尿病、痛風、運動不足、ストレスなどをあげられる。福大病院の成績でも危険因子は、高血圧と喫煙であり、とくに若年者の心臓病の最大の危険因子が喫煙である、と強く警告した。運動療法は、暑すぎず寒すぎない環境で、毎日か一～二日おきに三十分ないし一時間の軽い縄跳び、ジョギング、水泳などの効用について紹介した。

(5)胃がんと肺がん

外科第二　犬塚貞光教授

胃がんの根治手術目撃例の、五年生存率は六六・七%で以前の諸成績よりも向上してきたことを示し、その理由として第一に早期発見、第二は広般なリンパ節廓清により、第三には制がん剤の応用であることを述べた。一方近い将来胃がんに代って猛威を振るう可能性のある肺がんについては、喫煙の害を強調した。五十才以上で、大量長期の喫煙経験者には年一～二回の定期検診をすすめた。肺がんの手術による五年生存率は各国とも二〇%であるので、早期発見と早期切除の重要性を強調した。

以上の五題の講演について、聴衆から約三〇問に及ぶ身近かな問題についての質疑が提出され、志村、奥村両教授の司会でそれぞれの演者から懇切な解答がなされたが、時間の制約のため半数以上の質問は割愛せざるを得なかった。主催者の予想を上回って六〇〇名を越える聴衆がつめかけ、健かに老いるための成人病への関心の大きさに感銘を新たにした。

（奥村恂記）

健康展

（パネル展示・健康相談・検診など）

ときめき昭和五十七年七月二～四日　福岡国際センター

西日本新聞社と共催で、七月二―四日の三日間、福岡国際センターで開催された。

まず七月二日午前十時、十周年記念会名誉会長樋口謙太郎教授、同会長西園昌久医学部長、福岡県医師会石田正太郎会長、西日本新聞社福田利光社長らが出席して開会式が行われ「自分で育てる心とからだ」をテーマに、多面にわたる健康づくりへのアドバイスがなされた。三日間にわたる入場者は延五千人、なんらかの形で福大行事による健康アドバイスを受けた市民はほぼ二千人に達した。

健康相談

この部門には(1)心の健康相談（七月二日午後）、(2)女性と小児の健康相談（七月三日午後）、(3)成人病健康相談（七月四日終日）が行われ、約一五〇名の市民が相談に訪れた。

(1)心の健康相談、教育職員三名が相談に当ったが、福大卒業生六名がコントローラー、ベシュライバーとなり、まずコントローラーが相談の主な内容を聴取し、相談者はコントローラーの報告をもとにして相談に応じ指示を与える方式をとった。そしてベシュライバーは健康相談の内容を記録した。相談をうけた市民は十八名であったが、大学その他のクリニックではみられない種々の相談があり、視点を新たにする意義があった。

(2)女性と小児、および(3)成人病、右記の心の健康相談とほぼ同様の方法により、相談に応じた。この両部門には、教育職員、卒業生をあわせて医師四十八名、学生七名が動員され、約一二〇名の市民が訪れた。

循環器健康診断

七月四日終日にわたり、医師二十五名、学生十四名、看護学生五名を動員して循環器系健診が行われた。この部門では、まず身長、体重の測定を行い（看護学生五名）ついでラブスティックによる検尿（医師二名、学生五名）、血圧測定（医師二名、学生五名）、および心電図記録（医師十三名、学生四名）を行い、各検査データを総合して判定（医師三名）、異常を認めた場合はスーパーバイザーである医師の指示をうけ、必要あれば健康相談のセクションへ送る方式をとった。

受診者数、男一〇七名、女一四〇名　計二四七名、

年令　大半が三〇～六九才

三〇才未満　七名

七〇才以上　一四名

これらのうち指導医のConsultationを必要としたもの　計三三名

それらの人々の異常所見は左記の通り。

ECG――三〇名

血　圧――二九名

尿蛋白――六名

尿　糖――三名

潜　血――一三名

胃　予定数七月二日午後五十名、同三日および四日午前八十名、計二一〇名

受診者数一五一名

子宮　予定数七月二～四日午前各一五〇名、計四五〇名

受診者数二〇四名

乳腺　予定数七月二日午後一〇〇名、三日一五〇名、四日午前一〇〇名、計三五〇名

受診者数二八八名

総計六四三名が受診した。その結果精密検査を要するものが、胃二七名（一七・九%）、子宮五名（三・四%）、乳腺一四名（四・九%）あり、現在精密検査が行われている。要精検率は何れもほぼ平均的な率であった。精検結果が判明するまでにはまだ日数を要するが、全員の精検受診とその把握のため、公衆衛生学教室と対ガン協会が協力してフォローアップする予定である。

受診者は予約者が七～八割しか実際には受診しなかったので予定数に満たなかったが、受診した方々は予定時刻前から会場につめかけ受付前に列を作り、中には佐賀県、大分県からわざわざ受診された人もあり、大変好評であった。特に乳がん検診はまだあまり広く実施されていないため、熱心な人は次回は何時あるのかという質問までであった。

なお、胃集検フィルムの読影は第一内科八尾助教授の下で実施され、子宮がんスメアは対ガン協会でスクリーニング判定の後、本学産婦人科で総合判定された。

（重松峻夫記）

がん検診

福岡県対ガン協会の全面的な協力により、胃、子宮、乳腺の無料がん検診を七月二、三、四日の三日間、国際センターに検診車三台を集めて実施した。受診者は西日本新聞社が同誌上で予約募集すると共に、当日会場でも受けつけた。各検診の予定数および実施数は次の通りである。

栄養診断および相談

近年過剰栄養、肥満が問題となりまた成人病と食生活の関係も関心を集めていて、コンピューターを使っての簡易栄養診断が各所で人気を集めている。そこで今回も県民健康展の方式を借り、県栄養士会および富士通の協力で「FACOMシステム80」による栄養診断とそれに基く栄養指導を七月二～四日の三日間実施した。さらに七月四日には成人病健診および同相談と関連して、特殊栄養相談も実施して好評を博した。

また、会場には栄養解説のパネル（県民健康展より借用）および食事献立モデル（市医師会より借用）の展示と共に、福大病院栄養室より、各種食品中の食塩含有量の実物展示も行われ、これら模型および実物展示は一般の人にわかり易く、強い印象を与えたようである。

コンピュータ栄養診断および相談を利用した人は三日間計三五四名にのぼり、特殊栄養相談も十二名（四日のみ）と各種相談、診断中で最も多い参加者で、毎日栄養士七～九名（うち県栄養士会の応援四～五名）その他のスタッフ十一～二名がこれに当ったが、栄養士は実物展示等の説明をする時間がさけない程であった。

今回の栄養相談は、具体的な計画が遅れ準備期間が殆どなかったが、福大病院栄養室のスタッフの努力と県栄養士会の協力、また富士通のミニコン提供と人的援助により、何とか成功裡に終ることが出来た。関係各位の協力に感謝します。

（重松峻夫記）

人工蘇生法指導

七月三、四日の両日午後、約二時間半にわたって行われた。まず「生命の息吹き」「新生命の脈動」と題する映画を上映して、蘇生法の意義を理解させ、ついで模型四体を使って、心臓マッサージとマウス・ツー・マウス法をマン・ツー・マン方式で指導した。

この部門には、麻酔科田中経一助教授、松永万鶴子助手を指導者とし、医師七名、学生八名が動員され、五二名の市民が実際的な指導をうけた。

体力測定

体育学部の協力をえて、七月二～四日終日にわたって行われた。

まず問診、心電図検査で体力測定に適しているかどうかを判断し適応のある人に対しては単純反応時間テスト、ステッピング、脚伸力測定、エルゴメトリーなどで、年令相応の体力があるかどうか、どのような運動をしたら良いかなど、科学的な指導を行った。

この部門には、体育学部進藤教授、田中助教授のほか、医師、技手、学生延六十六名が動員され、一五〇名の市民が訪れた。

パネル展示

医学部十周年記念行事の一環として、国際センターの約三分の一の場所を使い、パネル展示を行った。パネルの内容から制作までについては、各科の本学卒業生が担当した。若干、時間的余裕がなく各担当者には相当な負担があったようであるが、卒業生は実力を発揮し、一般市民の方々に理解できるような内容に充実することができた。

パネルは七月二日から四日までの三日間にわたって展示された。各科からのパネルの内容を簡単に紹介すると

一、成人病コーナー

糖尿病（一内科・眼科）

高血圧症（二内科）

狭心症（心臓外科）

前立腺肥大症（泌尿器科）

一、癌コーナー

胃癌（二外科・健康管理科）

肺癌（二外科・公衆衛生学）

一、子供コーナー

子供とアトピー性皮膚炎（皮膚科）

川崎病（小児科）

一、診断コーナー

CTスキャンによる診断（放射線科）

超音波診断（産婦人科）

一、その他

胆石症（一外科）

腰痛症（整形外科）

精神病の症状と診断（精神科）

福岡県の疾患統計（公衆衛生学）

と以上のように各コーナーに副題をつけて展示した。

この期間中、一般市民の数多くの方々が、パネル展示を熱心に見学されていた。各コーナーの担当者への質問も多く、いかに自分の健康について関心が高いか、この十周年記念行事のパネル展示に携わり、実際の反響の大きさからも理解できた。

（為末紀之記）

*** 祝　卒　業 ***　　昭和57年第５回卒業生

福岡大学医学部 同窓会の発足

予てより福岡大学医学部卒業生各位の念願であった、医学部同窓会の発会式が、七月三日の医学部創立十周年記念式典にあわせて催された。発会式は、まず総会が行なわれ、この日に至るまでの経過説明の後、会長選出がおこなわれ山嵜節君（第一回卒）を全員一致で承認した。同窓会規約により会長は各役員を指名し、これも全員一致で承認された。各役員は次のとおりである。

名誉会長　西園昌久医学部長
会　長　山嵜　節（第一回卒）
副会長　高良由貴夫（第一回卒）
　　吉田　隆（第二回卒）
理　事　城戸　正喜（第一回卒）
　　穴井　堅能（第二回卒）
　　小金丸史隆（第三回卒）
監　事　田口　純一（第一回卒）
評議員　浅川　昌平（第一回卒）
　　権藤　英資（第一回卒）
　　浦田　秀則（第三回卒）
　　田代　研児（第四回卒）

次に、昭和五十六年度の行事・会計報告が行なわれた。

後半は同窓会名誉会長の西園医学部長から「長く待望されていた同窓会を医学部十周年を迎え発会されたことは喜ばしいことで、今後医学発展の中心となるような同窓会に成長するように」との御祝辞を頂いた。続いて、朝長病院長から「同窓会各会員の和というばかりでなく、医学の研鑽に役に立つ同窓会であるように」と、さらに前医学部長であり病院長であった樋口教授より、「他の医学部に負けない、福岡大学医学部カラーのある皆の和を大切にして欲しい」との数々の励ましと期待を込められたお言葉は、医学部同窓会を勇気づけるものであった。私達福岡大学医学部同窓会は福岡大学有信会の医学部同窓会として存在するのであり、有信会への協力のもとに歩むものである。今回、同窓会の発会を機に、大阪、長崎、鹿児島、その他の地区に支部を設けることになっている。

同窓会の次期総会は、昭和五十八年七月二日の第二土曜日と決定している。次回総会への数多くの会員諸氏の参加をお願いしたい。総会は約一時間で閉会し、十周年記念パーティーへ全員参加し、久しぶりに会う各会員、教授、助教授などの各恩師の先生方と、医学の在り方、医師の在り方などについての談合が遅くまで続いていた。（同窓会発会式の写真は四面に掲載）

（高良由貴夫記）

春の医師国家試験に七〇名合格

昭和五十七年四月二、三日に行なわれた第七十三回医師国家試験の合格者が厚生省より発表された。合格者および研修先は左記のとおり（福大病院研修生は科名のみ）。

荒牧　裕貴　第二外科
石井　龍　泌尿器科
石河利一郎　鳥取大第一内科
井上　和則　岡山大産婦人科
井原　裕二　健康管理科
岩尾　忠　久大内科
占部　嘉男　第二内科
大堂　孝文　第二内科
大野　裕　鹿大第二外科
岡本　郷子　健康管理
岡本　潔　第一外科
落合　薫　不明
角谷　明彦　和歌県立医大
木下　昭生　第二内科
木村恒二郎　法医学
久保　達哉　第一内科
隈本　正人　第二内科
坂本　亘司　九大小児科
白井諫太郎　第一外科
田原　春夫　泌尿器科
當安　昌子　放射線科
徳永　剛　第一内科
中村　克彦　心臓血管外科
新居見和彦　小児科
原田　迅明　麻酔科
広瀬　和人　関西医大整形外科
北城　厚志　産業医大第一外科
前田　純雄　健康管理科
松田　年浩　脳神経外科
松元　博美　鹿大麻酔科
宮原真奈美　第一内科
本村　光明　佐賀医大内科
森　奈津子　皮膚科
山口　覚　小児科
吉田　一寛　麻酔科
吉永　真也　脳神経外科
渡辺　法明　第一内科
有門　卓　心臓血管外科
今泉　忍　佐賀医大眼科
卜部　克彦　第一内科
大久保智子　第一内科
片岡　泰文　熊大麻酔科
加藤　整　眼科
川上　剛孝　久大放射線科
河野　純子　九大眼科
古郷　博　宮医大精神科
陣内　祐一　整形外科
末長　正弘　長大第二内科
長沼　敬子　放射線科
船越三樹子　第二内科
松永　英裕　整形外科
三宅　純　心臓血管外科
森　幸司　健康管理科
吉田　力　久大第一外科
田原　亨　九大温研
樋口　訓久　心臓血管外科
高橋　悦司　愛媛大小児科
中山　郁男　産婦人科
松本信一郎　産婦人科
内田　敏文　第一外科
妹尾　一雄　久大耳鼻咽喉科
友成　明子　久大眼科
野崎　善美　放射線科
宮崎　秀人　久大第三内科
国崎　真　健康管理科
城間　公博　熊大整形外科
橋口　雅尚　第一外科
棚瀬　一幸　健康管理科
野田　寛　第一内科
吉峯　晃一　耳鼻咽喉科

なお本学からは新卒者一一五名既卒者三十一名の計一四六名が受験、合格者七〇名で合格率は四十七・九％であった。

宮崎一郎教授ご退職

福大によばれた頃

宮崎一郎

九大に入学してから教授をやめるまでの四〇年間、私は大部分を福岡市内で暮していたのに福大のことはほとんど知らなかった。九大をやめる頃になって福大にも医学部ができるとききはじめて、そんな立派な大学だったのかと、自らの無知にあきれたものである。ところが思いがけないことから、その福大に勤めることになり、七年半という短期間ではあったが、二〇余年にわたる九大時代以上に実り多い研究生活を送ることができた。人の運命は誠に不思議なものである。

一九七四年の初秋、ミュンヘンの学会を終えて帰国した翌日から頭を痛めたのが、福大の問題であった。西園学部長をはじめ、多くの人々から出馬をすすめられたが、曽て鹿医専と九大で新講座を開いた当時を思い出し、今さら同じ苦労をする気には、どうしてもなれなかった。

しかし、再度足を運ばれた学部長には、とにかく一度現場を拝見した上で、と答えざるをえなかった。初めて福大を訪れた日、私が希望したことは、視聴覚教育の推進であった。三五ミリ幻燈器は、私の好きなドイツ製でうれしかったが、一六ミリ映写器は気に入るのがなく、至急にエルモの新型を備えてもらった。教育に欠かせない標本類は大部分を九大、一部を久大から分けてもらい、さらに他大学から寄贈も加えて、小型ながら一応の展示室を作ることができた。

研究面では、内外の大学に依頼して多数の別刷を集めることができたが、特に旧友ビーバー教授がチュレーン大学（米）に車が田舎町風の狭い道路をぬけ出したとたん、目の前に水あり山ありという、すばらしい環境に、まず気を好くした。研究棟に入ると廊下は光り、塵一つないという清潔さに感心し、その上、数人の旧知に温かく迎えられて、私はついに「福大ゆき」を決心したのであった。

九月二十八日、学長をはじめ学部長、病院長など、お歴々の前によびだされたが、その席で私が希望したことは、視聴覚教育の推進であった。三五ミリ幻

保存されていた膨大な別刷を二度にわたり寄贈されたことは、大きな感激であった。問題は研究費で、私が着任した時は既に底をつき、他教室から借金せざるをえなかった。そこで研究費集めに努力し、初年度は大山健康財団から、その後の五年間は文部省から補助をうけたが、ことに海外学術調査費を四年間もらったおかげで、大きな成果をあげることができた。その中で肺吸虫に関する私の新しい見解が、学会誌の編集委員長と食い違い、同誌への発表が容易でないことを知った。それだけに、「福大医紀」が発行されていたことは非常に有がたく、私は自説を逐次、速かに公表することができた。これも福大に勤めたおかげである。

この七年半の間に、多くの方々から受けた温かい御支援は忘れることができない。福大医学部、中でも私が直接手がけた寄生虫学教室が、ますます発展されるよう、心から祈っている。

（一九八二・七・一四記）

アニマルセンターで慰霊祭

例年七月に行なわれている動物慰霊祭が、今年も七月十四日午後アニマルセンターで取り行なわれた。今年は第五回になる。実験に供される動物は、その種類も年々増え、昨年一年間で研究に寄与し犠牲になった動物は、十種類以上で二万匹を越えている。

慰霊祭は、センター内に設けられた祭壇で行なわれ、西光寺住職の読経のあとセンター長より祭詞が捧げられ、日頃研究に従事している学内の多数の研究者、学生の焼香が行なわれた。

福岡大学医学会 第七回例会の報告

日　時　昭和五十七年二月十七日午後四時～
場　所　福岡大学医学部臨床大講堂

一、一般講演
太学院学生
1、人間生物系　那須康典
「モルモット結腸紐に対するisoprenalineの抑制効果」
司会　今永一成教授
2、病態機能系　河野正司
「健康者の等速連続傾斜刺激による動揺病の研究」
司会　曽田豊二教授
3、病態生化学系　吉田豊和
「虚血性心疾患患者の運動療法」
司会　荒川規矩男教授
4、社会医学系　徳永雄一郎
「精神分裂病者・うつ病者・神経病者の面接時における非言語性行動に関する研究」
司会　西園昌久教授
二、特別講演
宮崎一郎特任教授
「ベルツ肺吸虫の問題をめぐって」
司会　木船悌嗣教授

編集後記

福岡大学に医学部が開設されてはや十周年となりました。そのための記念行事をするとしても、たんに内輪での祝宴などを中心としたものでは大した意味もありません。福岡大学医学部は地域医療と密接に関連して存在しているもので、このような立場から種々の記念行事が行なわれました。十周年といっても、それは福岡大学医学部発展のたんなる一つの節目に過ぎません。この十年間に、大学院博士課程も併設されて論文審査も行なわれるようになり、また研究棟、アニマルセンターなども増設されましたが、創設期に併う種々の問題の解決に追われることも多く応急処置ですまざるを得なかったこともないではありません。しかし、この十年間で基礎固めができました。これからは長期展望の上に立って、高いレベルの発展に進む重要な節目かと思います。このような意味で、本号はその特集号といたしました。そのため集まった記事のうちで、十周年記念には関係しない他の記事の一部を次号に廻さざるを得ないことになってしまいました。

本医学部では、カリキュラムの大巾な変更、視聴覚棟・本院の増設、分院および関連病院の問題などが現在検討されております。しかし発展は最終的に人の問題に帰するもので、医学部の職員および学生一同、内面の充実と外への発展に努力を積み重ね、福岡大学医学部を世界の一流として認められるものにしたいものと考えております。

（古川記）